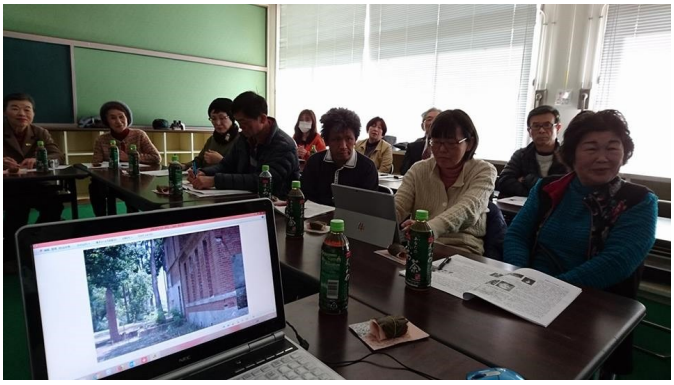
発行日2018年6月19日

ほぞん通信 第2号

発　行　人　NPO法人龍ケ崎の価値ある建造物を保存する市民の会　代表　前田享史
お問合せ　080-6637-1950
Ｅメール　info@maeda.main.jp

旧竹内農場西洋館元居住者 真中さんを囲む会



去る3月22日、龍ケ崎市民活動センターにて真中さんを囲む会を開催しました。

当日はＮＰＯ龍ケ崎建物保存会会員をはじめ、龍ケ崎市役所からも該当する部所の職員さんが参加。

真中さんは戦時中から終戦後まで西洋館にお住まいだったことがおありで、当日は当時西洋館に住むこととなった経緯やどのような建物だったかについてお話しくださいました。

当時西洋館は建屋の中もかなり荒廃が進みトイレも壊れかけ、渡し板をした簡易なものであったとかそんな話も飛び出し、竹内明太郎が開設した農場の面影は知る由も無い状態だったということが伺えます。

西洋館は昭和7年頃には代理人が小作料を徴収していたという背景があることから、真中さんご一家もこの西洋館を紹介され、戦時中の大変な時期を西洋館で過ごすこととなったということが想像できます。

終戦後ほどなくして、ご一家は西洋館をあとに別な地域へと引っ越しされることとなりました。

西洋館はその後完全に無人となり、周囲に樹木が生い茂り、隠された廃墟となったのは皆様も良くご存じのことと思います。

※以下、当日の質疑応答の中から一部抜粋

前田）映像を見て何か気づくことがありましたらお話しください。

真中）階段は西洋風のらせん階段になっていて鉄骨の上に板張してあった。

宮崎）木造の階段で、階段の足板を付けたところは漆喰が塗れてないから跡が残った。3回廻って90度になっている

真中）2階にはいつの間にか、知らない人が住んでいた。私の父は八代の黒田さんから借りた。黒田清さんはよく訪ねて来てくれた。開拓で八原に来た人（戦後）

前田）明治政府の津田出が四国から農民を連れてきて開拓に当たったが、失敗に終わる。農地は小作民に払い下げられたが、農民の生活は苦しく、そんな時に竹内農場ができて、生活ができるようになった。女化の農民は助けられた

真中）竹内留吉一家があった。子供がいなかった。事務所だった。おじちゃん、おばちゃんがいた。多分竹内家の身内じゃないかな？稲葉さんのところにものすごいコンクリの井戸があった。水がなくなることがなかった。我が家は年中水を貰いに行っていた。竹内農場が掘ったんじゃないかな。綱で下げて水をくみ上げた。釣べ式になってなかった。入口付近にある竹内家の墓が竹内留吉さんの墓。昭和14年から住んで、弟が生まれた。父は出征　21年帰ってきた。父は、いろいろなものを作っていた。広間ではバクダンつくって袋詰め、サツマイモを煮て飴を入れた大学芋、せんべい焼きなどいろいろ。4歳から中学卒業まで住んだ。

前田）トイレは如何でした？

真中）高いトイレ　床が抜けて板をはった怖いトイレだった。溜めるところがあり、溜まったら畑にまいた。

前田）雨漏りは？

真中）2階はなかった。広間との繋ぎ目のところが雨漏りしていた。地下室も水が入り込んでいて使えなかった。居間にも囲炉裏があった。地下室があるところが玄関。地下室に板？を渡した。押入れもあった。

宮崎）広間に仕切り跡があった。

真中）間仕切りがあった。2階は遊び場だった。他の家族は数年しか住んでいなかった。押入れもあった。

前田）学校は？

真中）馴柴中（今の愛国学園）、小学校は馴柴小。

宮崎）窓は上げ下げ、縦軸回転か？

真中）窓は上げ下げでした。思い出しました。

宮崎）レンガで直角の窓をつくるのは大変、レンガ3辺削りだし、くさび形で総てオーダーメイド。2700個のレンガ、金に糸目をつけずにトイレの後から刻印が出た。上敷面製のレンガで、上敷面とは深谷にある地名。　牛久シャートーより高級品、だからこれまで持った。開口部すべて八角形、開口部だけ。設計者・施主・レンガ屋さんのこだわり　今で7億円。

田中加代

西洋館

新事実が続々と！　旧竹内農場西洋館に関する市の調査報告会

4月21日（土）市役所別棟にて、市・生涯学習課による旧竹内農場西洋館の調査報告会が、約3時間２部構成で行われた。1部は生涯学習課梁取課長から「竹内家文書・竹内明太郎日記調査報告」。2部は西洋館の調査を行ったマヌ都市建築研究の研究員今井氏より「竹内農場に関する資料から読み解く赤レンガ西洋館の特徴」について。

この調査報告会は、新聞各紙にも取り上げられ、市内外からの関心が高かった。

１部、竹内家文書・竹内明太郎日記調査報告

西洋館は竹内明太郎が建てた別荘で、後に、弟直馬（綱四男）の住居となり、昭和7年まで居住していた。それに合わせて、西洋館の名義も明太郎から直馬に変更になった。竹内農場は竹内鉱業(株)の付属農園で、茨城無煙炭鉱への食糧供給を担っていた。竹内鉱業の農園は九州唐津や北海道夕張にも存在し、当地の農場を牛久農場と呼んでいた。土地の名義は良三（明太郎・次男）、廣（綱・七男）、直馬（綱・四男）に分かれていた。

西洋館の建築費に係わる請求書があり、請求元が太田圓七建築部　大田圓七（東京市芝区西久保八幡町）となっている。設計者は誰なのか不明である。

竹内家農園内庭園設計図によると、設計者は長岡安平という公園行政官のパイオニアである。

大正13年に直馬が西洋館に引っ越して来た頃は、農地の多くは小作化していた。その後、西洋館が無住となり、農地の管理は代理人を置いた。この状態が戦後まで続き、昭和21年、GHQの政策により西洋館の敷地を除く農地の総ては小作人に譲渡され、竹内農場は消滅した。

２部、赤レンガ西洋館の特徴

西洋館の特徴は、オランダ積みのレンガ造りで、レンガの産地は上敷免製の刻印があり、東京駅と同じ日本煉瓦製造(株)（現深谷市）製である。設計施工を請け負ったのは大田圓七建築部。設計者は特定出来ないが、同時代に活躍した大田圓三の可能性が考えられる。用途は養蚕室付の竹内明太郎の別荘として建設された。

西洋館は次の３つの空間で構成されている。東棟は住居部分、レンガ造り２階建地下１階。東棟北側は水回り、木造1階建。西棟は養蚕室、レンガ造り１階建。

竹内家農園内庭園を設計した長岡安平は造園家の先駆的な存在で、東京府における公園業務を一任される。晩年は上層階級の個人庭園設計を数多く手掛ける。近代公園史において欠く事の出来ない人物であった。

ただし、竹内家農園内庭園計画がどの程度まで実行されたかは不明。

以上は説明会の概略で、何よりも驚いたのは、西洋館の平屋建て部分が養蚕室であったという調査報告。

レンガ造りの館で養蚕を行う例は他になく、まして、東京駅や迎賓館と同等の高級レンガが使われていて、意匠も凝っている。このような西洋館が養蚕室を兼ね備えていた別荘と言われても実感がわかない。

今後竹内明太郎と養蚕の関わりについて調べる必要があるかもしれない。

前田享史

竹内明太郎の業績は凄いぞ！

竹内綱と竹内明太郎親子二人三脚の竹内鉱業による鉱山業は、単なる石炭採掘事業と思われるかもしれない。ところが、竹内鉱業は将来的な国の繁栄をも念頭に入れ、鉱山業に止まらず、機械産業や地場産業の発展をも考え、日本の工業化及び産業発展に著しい貢献をした。

当地の竹内農場もそうした過程で開設されたのであるが、これまで父親の竹内綱が開設したものと考えられていた。しかし、北國新聞社出版局「沈黙の巨星～コマツの創業の人・竹内明太郎伝」を読むうちに、竹内明太郎の並外れた偉大さが頭の中で膨らみ、もしかすると竹内農場は明太郎が開設したのではないか？という思いが強くなった。今回の市の調査報告により、それがはっきりした。やはり明太郎が開設した農場であった。

こうした誤認は数多くあると思う。例えば高知工業高校の創立者は竹内綱と、一部では誤った情報がある。実際は綱の「工業富国基」の信念を受け継いだ明太郎が創立した学校なのだ。

また、小松製作所やダットサン（現日産自動車)の創業、早稲田大学理工学部の創立に関しては、明太郎は主導的立場、あるいは全面的な支援をしながらも、黒子に徹して自らを誇ることがなかった。そのため優れた業績を残しながらも、彼の人物像は世間からはあまり知られていない。

当地に残る赤レンガ西洋館は、このような竹内明太郎が別荘として建てた貴重な建造物である。その保存と共に、彼の業績が正当に評価されることを願う。

前田享史

市民活動センター主催講座　旧竹内農場の歴史と西洋館について

4月22日（日）ＮＰＯ龍ケ崎建物保存会は市民活動センター主催の講座に協力するとともに、旧竹内農場西洋館の歴史的な価値と建造物としての素晴らしさをアピールしました。

最初に、映画プロデューサー撮影のドロン動画上映を行い、次に「旧竹内農場の歴史」に付いては前田（理事長）が、そして「西洋館について」は一級建築士の宮崎（副理事長）が講師を勤めました。司会は田中（理事）が勤めました。

参加者35名。歴史に関心を持つ人が多く、皆様熱心に耳を傾けて下さいました。何より驚いたのは、西洋館のレンガが上敷免製という情報をネットで調べられ、深谷市教育委員会文化財保護の担当者が遠方から駆けつけて下さったこと。

ご参加くださいました皆様には感謝申し上げます。

前田享史

市民活動センター主催講座より感想

41歳男性（深谷市）上敷免のレンガは茨城県でも確認できたのは始めてだと思い。

43歳男性（久保台）今日の講座を通じて旧竹内農場や竹内家、赤レンガについて見識を深める事が出来ました。いつか西洋館を見に行ってみたいものです。

70歳男性（松葉）どうもありがとうございました。この西洋館がとりこわされずに市民の財産として残されれば良いと思います。よろしくお願いします。

66歳女性（長山）太陽光になるのは残念。なんとか残せないものか。

74歳男性（川原代町）専門的な話を見聞きさせてもらい参考になった。このような機会を数多く設けていただきたい。

59歳男性（中根台）龍ケ崎の価値ある建造物として未来永劫残していくことは色々の面で特に歴史を学ぶために不可欠と思います。

75歳男性（牛久市）歴史、建築共、興味深く伺いました。ぜひ保存していただきたいと思いました。

76歳男性（若柴町）重要な建築物であったことが判りました。何とか保存出来ないものでしょうか。国への働きかけ等はできないものでしょうか（行政を通じ）なつかしい話も聞けて勉強になりました。

赤レンガ門塀が、国登録有形文化財へ

国の文化審議会は2018年３月９日、「旧諸岡家住宅煉瓦門及び塀」を登録有形文化財に登録するよう文部科学相に答申しました。

「旧諸岡家住宅煉瓦門及び塀」は、明治後期、龍ケ崎町長も務めた実業家諸岡良佐氏が竜ケ崎駅近くに建てた邸宅のレンガ造りの門柱と塀であり、長い間、市民に親しまれてきました。この邸宅の取り壊し時には門柱と塀も同時に解体されることになっていましたが、明治の近代化遺産として保存を望む赤レンガ保存実行委員会(市民団体)が中心となって、2015年１０月現在地に移築されました。

なお、登録有形文化財としての建造物登録は、龍ケ崎市においてこれで２件目となります。当市で最初に登録された旧小野瀬邸では、認定後、登録有形文化財の登録証とともに標識(プレート)が交付され、そこには「この建造物は貴重な国民的財産です」の記載があります。

登録有形文化財とは　1996年10月1日に施行された文化財保護法の一部を改正する法律によって、保存及び活用についての措置が特に必要とされる文化財建造物を、文部科学大臣が文化財登録原簿に登録する「文化財登録制度」が導入されました。この登録制度は、近年の国土開発や都市計画の進展、生活様式の変化等により、社会的評価を受ける間もなく消滅の危機にさらされている多種多様かつ大量の近代等の文化財建造物を後世に幅広く継承していくために作られたものです。

下野昭雄（赤レンガ保存実行委員会）

市川市の赤レンガ保存運動を視察

2018・1・26（月）千葉県市川市のルーテル市川教会で開催の「赤レンガ・フォーラム　2018」に、当会から前田理事長と私の2名が参加した。フォーラムの第１部は、15時からの教会堂内部の見学と主催者の案内での赤レンガ建物の見学だった。赤レンガ建物と敷地の所有者である千葉県から現在立入が禁止されているため、隣接の小学校敷地内から境界柵越しの垣間見の見学だった。

18：30～20：50の第２部のフォーラムでは、各界有識者3名のゲストから市川市の赤レンガ建物保存についての必要性の真摯な意見発表があった。その後に主催者より外部の参加者の中から3名が指名された。最初に前田理事長が旧竹内農場西洋館の史跡と文化財としての価値を参加者に力説した。

時間の関係で私たち２名は最後まで参加できず、20：30に途中退場してJR佐貫駅に22時に帰着した。

小林昭雄

市川市国府台赤レンガ

西洋館、煉瓦について

先日、市の調査報告会が行われ、レンガの産地が上敷免製であることが公表されましたが、それ以前にNPO龍ケ崎建造保存会では西洋館のレンガのルーツを探し当てていました。

レンガの平場（おなま又はみこみ面と呼びます）が露出している部分に刻印が有りましたので、手掛かりに、撮影してきました。

トイレの上屋が腐って、消滅したために、露出していたもので、上敷免製と判明。

「上敷免」とは、深谷にある地名で、「じょうしきめん」と読み、日本煉瓦製造のブランドです。

東京駅や迎賓館と同じ、高級レンガ（当初から、普通レンガではなく、品質を向上させた、焼きすぎレンガであることは、経験的に解っていました）ですね。

明治35年（1902）頃の日本煉瓦製造の普通煉瓦（東京形）の寸法は、長さ７寸5分、巾3寸6分、厚2寸（227×109×60.6mm）であり、実際に西洋館で使われているレンガの寸法は厚さが55ｍｍと薄い、これは、寸法が制定されてから、20年近く経過しているので、変更があったと思われますが、詳しくはわかりません。

大正末まで、煉瓦の寸法は規格化されておらず、1925年にJES(日本標準規格）によって、210×100×60mmに定められた。これは、現在のJIS規格と同じ寸法である。

レンガの成型は連続押出成形で切断は、ワイヤーカッターで、平場（見込み面）にはその痕跡が残っている、現在まで続いている成形方法である。（明治35年ころは、瓦と同じように、プレス成型であったと思われます）

日本煉瓦製造株式会社は、平成18(2006)年約120年の歴史に幕を下ろし、工場の一部は、国重要文化財に指定され、平成19年度に深谷市に寄贈されました。

一級建築士 宮崎征志

編集後記

当ＮＰＯ法人は会名が示す通り、龍ケ崎市内の価値ある建造物の保存運動に取り組んでおります。中でも、存亡の危機と言われている旧竹内農場西洋館の保存は最重点課題と考えております。

1年前までは市民の間でもほとんど知られていなかった旧竹内農場西洋館。昨秋行いました「旧竹内農場西洋館イベント」以降、当広報誌の創刊もあり、西洋館の置かれている状況が市民の間に少しずつ浸透しています。

先日、市・生涯学習課による西洋館調査報告会が行われました。結論はまだ出ていませんが、市の保存に向けての前向きな姿勢が感じられました。

一方、市民主導で移築事業を行った旧諸岡家住宅煉瓦門及び塀が、このたび国有形登録文化財になることが決定しました。旧小野瀬邸に続いて２件目となります。龍ケ崎を愛する市民の皆様と共に喜び合いたいと思います。

これからも難題が山積みですが、古い建物を生かしたまちづくりを念頭に活動を続けたいと思います。

今後ともほぞん通信のご愛読を宜しくお願いいたします。

編集長　前田享史

当NPO法人の略称を決めました

正式名称　特定非営利活動法人龍ケ崎の価値ある建造物を保存する市民の会

略　　称　**ＮＰＯ龍ケ崎建物保存会**

ウエブサイト　http://tatemono-hozon.net/　検索　龍ケ崎保存